

こころが動いたとき

## 『無我夢中の3カ月 デイでのターミナルの取り組み』

看護師 横山 恵子

私はアットホームに入社し、はじめはデイサービス喜楽庵の看護師として勤務をしていました。その中で特に印象に残っている利用者の方とのかかわりについてご紹介させていただきます。

デイサービスではじめてターミナルケアをしようとしたことがとても印象に残っています。その方は、90歳代の男性、独居で暮らしていた方です。とても温厚な方で、いつもニコニコして五目並べなども一緒に楽しんでくれていました。家では昔ながらの家長さんだったようで、息子さんに言わせると家族に対しては「独裁者」だったそうです。そのため必要な時にご家族がお世話をしに来られるだけなので、お一人では家の中は片付けられない状態でした。認知症があったので訪問ヘルパーが朝・夕入り、デイサービスに毎日通い、食事・入浴・着替え（洗濯）等をお手伝いすることで暮らすことはできていました。

しかしある病気を持っておられて、家族の意向により入院・手術せず過ごしていました。だんだん病状が進行していき、毎日、尿便失禁が多くなり、家の中は尿便臭との戦いになってきました。ヘルパーさんの日々の努力も素晴らしいものでした。例えば、デイの送迎時にも、ご家族がいて用意などをしてくれる家ではないので、まずカギを隠してある場所から取り出し、開けて入っていきます。ベッドに寝ておられるので声かけし来訪を伝えます。起きるとお布団、着衣とも尿失禁で濡れています。そのままトイレ誘導し全部着替えますがトイレでうまく排尿できず、替えたばかりのリハパンやパッチを汚してしまいました最初からやり直します。ヘルパーさんに汚れものを増やして申し訳ない気持ちがいっぱいです。その後、服を着てもらうのですが、ご本人はベルトが大事なのです。ないと見つけるまでとにかく探します。どんどん時間が過ぎていきます。こちらも徐々にそのペースに慣れ、ベルトだけはよく目につくところに置くようになりました。次にすることは、前日の夕食のための弁当が残っていたらデイに持ち帰り処分することです。でもそれがまた見つかりません。部屋中さがしてみると、オーブントースターの中、衣服の下、そして一番多かったのは布団の中です。本人曰く「この中に入れておけば温かい」と。そんなことしても次の日は食べないのにと思いながら、こっそり回収してきます。また水分補給のため、水筒にお茶を入れておいて、次の日に回収することもしていました。その水筒がまた見つかりません。何処へいった、と毎日毎日さがしもので頭をひねり、推理してと。はらはらしながらも、わくわくドキドキもする日々でした。

徐々に朝も起きづらくなり、デイにも行きたくないと言われることが多くなってきました。そのため主治医を中心にケアマネ・ヘルパー・デイサービスで会議を行いました。ご家族は本人が入院の意思がないこともあり、デイに通いながらご自宅で最期を迎えることを希望され、みんなでそれを支えようと決めました。

それからは毎日「緊張」が走りました。

ある日、迎えに行くと、いつものベッドに寝ていないのです。一階のトイレにも台所にも奥の間にもいません。外を見ても居る気配はありません。行方不明になったか、何処へ行った？あとは二階しかないと思い、恐る恐るはじめてあがる二階へ行ってみました。大きな家なので部屋がいくつもあります。一部屋ずつそっとのぞいてみますが、いない。次もない。最後の部屋をのぞくと、ベッドがありそこに横たわっています。のぞき込むと、かすかな寝息がわかります、ほっとして、よかった、生きていた！と。すぐ声をかけ起こして、デイに行く準備を始めました。

部屋中、からだ全体が便まみれになっていた時もあります。当然布団も汚れているのでかろうじてきれいな床にそっとおろし、服を脱がせ、タオルで全身清拭します。とにかく便が付いた手で触ったのでしょう、頭から顔まですべて便まみれです。大きなタオル一枚をボツにするくらい頭の前からつま先まで拭きます。とにかくデイに行けばお風呂がある。そこまで何とか連れて行こうと思い、その場から救出しました。歩行も徐々に難しくなり、車椅子で迎えに行くようにもなっていました。

そこまでしてデイに行かなければいけないか？という疑問や気持ちが出てきます。しかし、家に一人で寝ていて訪問サービスを受けるだけより、デイに行くことが可能な間はできるだけ外へ出て、一緒に過ごしてもらおう。そして温かいご飯を食べてもらおう。そしてゆっくりお風呂にも浸かってもらおう。もうちょっと、もうちょっと頑張ろうと、ご本人も私達も頑張りました。しかしある日、親族会議をされて、もうこれ以上在宅は無理と判断されて入院され、ほどなく亡くなられました。

私たちの「限界」を感じるとともに、主治医、ケアマネージャー、ヘルパー、デイの連携があれば、これだけのことができたのだと、そしてご本人もきっと喜んでもらったのではないかと思います。